

高山寺蔵『金剛頂瑜伽經』(浄院寺一切經)について

赤尾 栄 慶

はじめに

平安時代初頭、わが国の仏教界では最澄・空海の活躍が目覚しいが、写経史の上では平安時代前期の遺品は少なく、不振の時代として位置づけられている。純密が請来され、天台・真言両宗が加持祈禱の実践を主としたので、写経という作善そのものがふるわなくな

ったのと經典自体の需要が減少したとの見方もできる。このような状況の中で、関東諸国では承和年間、仁寿年間を中心にしたたび一切經の書写が命じられている。承和元年(八三四)五月、上野国緑野郡緑野寺にある一切經を底本として相模・上総・下総・常陸・上野・下野などの国司に一切經を書写せしめるようにとの勅が出されている(『続日本後紀』卷三³)。翌年正月には、それに加えて『貞元釈教録』¹や『梵釈寺目録』⁵所収の律論疏章・紀伝集抄なども書写するようにと勅が出されている(同卷四⁶)。更に承和六年(八三九)には今名のあがつた関東六カ国に武蔵を加えた七カ国に一切經の書写が命じられ(同卷八⁷)、仁寿三年(八五三)にも陸奥を含む関東六カ国に一切經の書

写が命じられているのである(『文徳実録』卷五⁸)。これら関東諸国における一切經書写の記録が写経不振といわれる平安時代前期には非常に注目されている。また単独の經典ではあるが、関東における写経の遺品としてよく知られているものに、貞觀十三年(八七一)、上野国前権大目安倍小水麻呂が発願した『大般若經』(通称、小水麻呂願經)がある。

さて今から取り上げようとする弘仁六年(八一五)の奥書と願文を有する高山寺蔵、重要文化財『金剛頂瑜伽經』三卷(浄院寺一切經)は、その書写年代も平安時代ごく初期で、先の『続日本後紀』卷三に見える上野国緑野郡緑野寺、すなわち浄院寺一切經の遺卷であることが知られており、六国史の記録との関連を示した具体的な遺品として夙に有名なものである。ただ、従来より浄院寺(緑野寺)の一切經の遺品であることは指摘されているが、『金剛頂瑜伽經』そのものの書写の背景があまり論じられていないように思う。そこで本稿では、『金剛頂瑜伽經』(浄院寺一切經)の書写の背景を中心に奥書や願文などの諸問題をも視野に入れながら、遺品の少ない平安時代前期の代表的古写経について考えてみたいと思う。

まず現状を見ることにしよう。三巻とも卷子本で料紙は楮紙、現在の紙色はうすい褐色をしている。表紙・朱漆塗棗形軸・巻紐はそれぞれ後補と見られ、各巻の見返しに天保元年（一八三〇）の修理銘がある。本文は三巻とも一筆とみられ、奥書より教興なる人の書写になることが知られる。平安時代前期の筆致で一字ずつ謹厳に書写されているが、のびやかさに欠けるやや硬直した筆致である。弘仁六年の奥書と願文の他に朱書、白書による加点が加えられており、肉眼で観察した結果を記せば次のようである（図版参照）。

〔1〕巻第一

（表紙）（朱書）「真第三箱」

（外題）金剛頂大教王經上巻

（首題）金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經第一

（尾題）金剛頂瑜伽經卷第一

紙本墨書 縦二六・五 cm 全長八五七・七 cm 紙数一六 紙長

（第二紙）五五・九 cm 界高二〇・五 cm 界巾（平均）一・八 cm

（印影）「高山寺」朱方印

〔2〕巻第二

（表紙）（朱書）「真第三箱」

（外題）金剛頂大教王經中巻

（首題）金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經第二

（尾題）金剛頂瑜伽經卷第二

紙本墨書 縦二六・五 cm 全長七五九・五 cm 紙数一四 紙長

（第二紙）五六・八 cm 界高二〇・五 cm 界巾（平均）一・八 cm

（印影）「高山寺」朱方印

〔3〕巻第三

（表紙）（朱書）「真第三箱」

（外題）金剛頂大教王經下巻

（首題）金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經第三

（尾題）金剛頂瑜伽經卷第三

紙本墨書 縦二六・五 cm 全長七六六・二 cm 紙数一四 紙長

（第二紙）五七・三 cm 界高二〇・五 cm 界巾（平均）一・八 cm

（印影）「高山寺」朱方印

〔奥書〕（各巻とも）

上野国 縁野郡 浄院寺

一切経本

掌経仏子教興

掌経仏子

写経主仏子教興

経師近事法慧

弘仁六年乙未六月十八日即平城宮御宇神野天皇之世也

奉為 皇帝皇妃太子諸皇左右大臣洪基無動

六親七世裕德有余近霽自身遠洽他界

一切行者法眼

無上菩提正因

〔加點奥書〕

●巻第一（墨書奥書の後）

（白書）〔1〕三月廿四日於仁和寺南御室点始同五日点了

(2)

(朱書)

「沙門叡算之」

●卷第二 〔墨書奥書の後〕

(白書)

(3)

(朱書) 〔寛弘五年三月廿六日於仁和寺之内南御室受学高尾法照
闍梨畢 沙門叡算之〕

●卷第三 〔墨書奥書の前〕

(朱書) 〔長元八年十一月十六日於田野御房点了 伝授師僧都御房
也〕

〔墨書奥書の後〕

(白書)

(4)

求法僧叡算

(朱書) 〔寛弘五年三月廿七日於仁和寺之内南御室高尾法照
闍梨受学了 沙門叡算之〕

〔見返し墨書・修理銘〕

●卷第一

〔秘密經王三十六卷弘仁六年五月依
海阿闍梨之勸進上毛沙門教興書進
右十無尽院藏中梶辛櫃之銘三十六卷之内
金剛頂經三卷現存 云々〕

天保元年七月奉修補之 高山沙門慧友護謹記

〔金剛頂經第二〕

(中略、奥書・願文同文ヲ写ス)

●卷第三

天保元年七月奉修補之 高山沙門慧友護謹記

〔金剛頂經第二〕

(中略、奥書・願文同文ヲ写ス)

●卷第三

〔金剛頂瑜伽經第三〕

長元八年十一月十六日於田野御房点了 伝授師僧都御房也

寛弘五年三月廿七日於仁和寺南御室点了始

高尾法照闍梨奉受之 沙門叡算之

天保元年七月奉修補之 高山沙門慧友護謹記

尚、現在判読がむずかしい加点奥書の部分は、『高山寺経蔵典籍文
書目録第一』(高山寺資料叢書第三冊)には次のように報告されている。

- (1) 「□寛弘五年」
- (2) 「□□闍梨奉受了 叡算之」
- (3) 「寛弘□年三月廿□日点了 求法僧叡算」
- (4) 「寛弘□□□」

これら三卷は、上野国緑野郡浄院寺で書写され、同寺の一切経として納められた経卷の遺品で、弘仁六年六月十八日の年紀と共に仏子教興が書写したことがわかる。また願文には今上天皇(神野天皇)嵯峨天皇はじめ皇妃・皇太子・諸皇・左右大臣の洪基の安寧と六親七世の眷属の裕福と功德を祈り、合わせて一切行者の無上菩提の正因となるよう祈願する旨が記されている。

浄院寺は、現在の群馬県多野郡鬼石町にある浄法寺のことである。鑑真の弟子道忠が創建したと伝えられており、緑野寺・緑野教寺とも呼ばれる。また浄法寺は広厳山般若浄土院と号し、最澄が著わした『法華長講会式』に

東土上野国 般若浄土院
道忠大禅師 信心弟子等
教興及道庇 助写一切経

と記されていることでも知られている。ここにある道忠大禅師の弟

子教興というのが「写経主仏子教興」その人である。また「助写一切経」とある一切経は、『叡山大師伝』の延暦十六年(七九七)の条に最澄が一切経の書写を発願した際に道忠禪師などが助写したという記事のものに相当すると見られる。浄院寺一切経は、先にも触れた如く、関東での一切経書写の底本となったように、当時の関東諸国としては貴重であり、なおかつ整っていた一切経であったであろうことが窺い知られる。ただ、浄院寺一切経の書写事業が弘仁六年に行なわれたかどうかは速断できない。

その他、奥書や願文の中で興味深いのは、まず嵯峨天皇が「平城宮御宇神野天皇」と呼ばれていることである。「平城宮御宇」は「神野天皇」にかかる言葉であり、神野とは嵯峨天皇の諱をいう。恐らく嵯峨天皇の諱を書き記した最古の写本であろう。「平城宮御宇」という表現は理解しにくく、大同五年(八一〇)に平城上皇が平城宮に移御し、薬子の変以後も平城宮に留まったという歴史的出来事があったが、それと何か関連があるのであろうか。「皇帝皇妃」以下の願文では、左右大臣とあるも、当時は右大臣藤原園人のみで左大臣はおかれていなかった。多分、儀礼的な定型の表現をとったものであり、なおかつ四字一句とするための方策であろう。ただ「皇妃」とあるのはある意味では正確な表現であり、檀林皇后こと橘嘉智子が皇后となったのが弘仁六年の七月十三日であるからである。

各巻に加えられている訓点については、『高山寺典籍文書の研究』¹⁴ (高山寺資料叢書別巻) に詳しいが、寛弘五年(一〇〇八)三月に僧叡算が仁和寺南御室に於て加点了たもので、白点は園城寺系統の西墓点、朱点は仁和寺系統の円堂点¹⁵が用いられている。また朱点は高尾法照阿闍梨より受学したものである。巻第三には長元八年(一〇三五)十

一月十六日に田野御房に於て点し了ったとの識語があり、この朱点は円堂点(異流)とされる。これらは国語資料としても重要であろう。伝来に関しては、いつ頃まで浄院寺にあったかは定かではないが、叡算によつて加点了た寛弘五年(一〇〇八)三月には京都にあったことは確実である。巻第一見返しの慧友の墨書によれば十無尽院にあったと思われるが、その後高山寺の真言関係の聖教を納めた経蔵に納められたことになる。表紙に「真第三箱」とあるのがそれで、『高山寺経蔵聖教内真言書目録』所収の典籍であることがわかる。この目録は建長三年(一二五二)に十眼房長真によつて記されたもので、鎌倉時代中期以降真言書の箱番号が改番されて「真」の字が冠せられており、現在もその大部分が高山寺の経蔵に納められている。

修理銘を記した慧友は、高山寺の聖教の整理や修理に力を注いだ学僧で、字は僧護という。伊賀上野に生れ、智積院第二十八世謙順についたが、後に一派を離れて高山寺に隱栖した。嘉永六年(一八五三)七月十日、七十九歳で没した。

二

『金剛頂瑜伽経』は、唐の不空三蔵(七〇五―七四)の翻訳になる密教経典で、『金剛頂経』、『金剛頂大教王経』、『三卷大教王経』などと略称されており、詳しくは首題にもあるように『金剛頂一切如来真実摂大乘現証大教王経』という。大日経と並んで「両部の大経」と呼ばれている密教経典の中でも最も重要な経典の一である。全体十萬頌十八会からなる経典といわれているが、実際は初会のみが存在すると考えられている。不空訳の本経は、この十八会のうち、初会

の第一品のみを翻訳したものである。内容は毘盧遮那如来が一切義成就菩薩の問いに答える形で説きはじめられ、仏身を成就する実践としての五相成身の観門、金剛界三十七尊の三昧耶と真言、金剛界大曼荼羅建立の儀則、四曼荼羅などが説かれている。異訳としては、金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』四卷、施護訳『一切如来真実摂大乘現証三昧大教王經』三十卷が知られている。

不空による翻訳年代は、『貞元釈教録』卷第十五の記録によれば唐の天宝十二年(七五三)河西節度使哥舒翰の請により河西武威に於て翻訳していることがわかる。わが国には大日経は既に奈良時代に請来されていたが、金剛界所依の本経は、大同元年(八〇六)に空海によつて請来されたのがそのはじめであり、空海の『御請来目錄』の新訳等経一四二部二四七卷の劈頭を飾るのもこの經典である。当然のことながら、空海請来の聖教類の中でも非常に重要な經典であつたに違いない。かの最澄が『金剛頂瑜伽經』⁽¹⁸⁾にはじめて触れたのは弘仁三年(八二二)十一月のことであろう。すなわち、最澄は同年十一月十五日に高雄山寺で行われた金剛界灌頂を受けるためであろうか、その直前の十月二十六日付の空海に宛てた消息で「金剛頂真実大教王經一部三卷」とこの經典の借請を行っている。わが国に請来されて六年後であつた。それ故、この經典は未だ巷間にあまり流布していなかったと推測される。

このような状況のなかで、弘仁六年(八二五)に上野国浄院寺で書写されたのが本巻である。関東の地ということを考慮に入れば、比較的早い時期に写経が行なわれたと思われる。何か写経を促す特別な事情があつたのではなからうか。その手がかりを与えてくれるのが巻第一の見返しにある慧友の墨書である。そこに

秘密經王三十六卷弘仁六年五月依

海阿闍梨之勸進上毛沙門教興書進

右十無尽院藏中梶辛櫃之銘三十六卷之内

金剛頂經三卷現存^{云々}。

とあるのは先に報告した通りであるが、これは天保元年(一八三〇)に行われた修理の際に高山寺慧友が書き留めたものである(図版参照)。十無尽院の梶辛櫃の銘を転写したものらしいが、ここに実に興味深い記事がある。『金剛頂經』などの密教經典三十六卷を弘仁六年五月空海の勸進によつて写経をしたという旨を教興が記しているという内容で、その際の『金剛頂經』三卷、すなわち本巻は現存しているというのである。これで想起されるのは、空海が弘仁六年三月から四月にかけて弟子の康守、安行らを使者として関東の有縁の人々に密教經典の書写を呼びかけていることである。すなわち、空海は同年四月二日付の「諸の有縁の衆を勸めて秘密藏の法を写し奉る応き文」(『性靈集』卷第九)⁽²¹⁾いわゆる「勸縁疏」の冒頭に

諸の有縁の衆を勸め奉つて秘密の法藏合はせて三十五卷を写し奉る⁽²²⁾。と述べている。ここで「有縁の衆」とされたのは下野の広智⁽²³⁾、陸州の徳一⁽²⁵⁾、甲州藤太守(真川)⁽²⁶⁾、常州藤使君(福当麻呂)⁽²⁷⁾らである。また

四月五日付で陸州の徳一に宛てた空海の消息⁽²⁸⁾には

空海、大唐に入つて学習するところの秘藏の法門は其の本、未だ多からずして、広く流伝すること能はず。衆縁の力に乗じて書写し、弘揚せむと思欲ふ。

とあることから、帰朝後九年の後にも空海請来の密教經典類があまり流布していなかった様子が窺える。それ故、慧友によつて転写さ

れた記事の信憑性は非常に高い。このことは、本巻の本文を三十帖冊子本や大正大藏經本と比較校合した時、三十帖冊子本と非常に類似点が多いことから確認される。⁽²⁹⁾特に本巻で注目されるのは、巻第一(第十一紙目)に後の写本などにはある一行が当初欠落している点である。すなわち

奇哉我大笑 諸勝大奇特

安立仏利益 常住妙等引⁽³⁰⁾

の偈頌に続く

時彼常喜悅根大菩薩身、從世尊心下、依一切如來後月輪而住。

復請教令、時世尊入一切如來奇特加持名金剛三摩地。⁽³¹⁾

(傍線筆者)

とある部分である。「後月」以下十七字が本巻にはない一文であり、後の本文校合の際にこの一文が行間に朱で挿入されている。加えて、三十帖冊子本も後に朱書でこの一文を補っている(図版参照)。これは、当初三十帖冊子本にもこの一文がなかったことを意味している。三十帖冊子本の朱書の挿入がいつ頃行なわれたかは検討を要するが、わが国に齎されたごく初期の金剛頂經の写本にはこの一文が当初欠落していたであろうことが推察される。⁽³²⁾これらにより淨院寺一切經中の經卷であった本巻は、三十帖冊子もしくは空海請來の經典に非常に近い寫經をテキストとして書寫されたことは間違いないであろう。そしてその時期は奥書にあるように弘仁六年(八一五)六月、すなわち同年三月から四月にかけて行なわれた空海の關東に於ける寫經勸進を承けて書寫されたものとみられる。⁽³⁴⁾恐らくわが国で書寫された『金剛頂瑜伽經』の現存最古の遺品と考えられる。

また本巻の本文に関して付け加えれば、梵語ヴァジュラ vajra(金

剛と訳す)の音寫語である「嚩日囉」が「嚩日囉」とあるべき三文字をほとんど「嚩、嚩」と二文字のように書寫しており、当時この用語が書寫した教興に正しく理解されていたかは疑しい。或いは密教經典の内容が未だ正しく關東は言うに及ばず、わが国の仏教界に浸透していなかった表れかも知れない。

三

本巻の書寫の背景などを尋ねたが、これらにより淨院寺(綠野寺)や道忠の弟子教興について從來あまり指摘されていないことが浮び上がってきた。從來よく知られているのは最澄との關係に於てであった。『叡山大師伝』⁽³⁵⁾によれば、最澄が弘仁六年(八一五)秋、實際には弘仁八年春に行なつたとみられる關東行化の旅に於て、上野國淨土院(綠野寺)と下野國大慈院に各々一級の宝塔を起し、塔別に千部八千卷の法華經を安置したとある。そしてその塔下に於て法華經を毎日、合わせて金光明經や仁王經などの大乘經をも長講したが、その様子は「所化の輩百千万を逾え、見聞せる道俗歡喜せざるといふこと無し」⁽³⁷⁾であつたといい、『元亨釈書』卷第一にも「東州經塔會、上野綠野寺、場に預りし者九万人、下野大慈寺は五万人、東民化に嚮うこと斯の如し」⁽³⁸⁾と伝えている。これは延暦十六年(七九七)最澄が比叡山で一切經書寫を發願した時、これを助けて「大小經律論二千余卷」⁽³⁹⁾を寫して以來、師資の關係を欠かさなかつた道忠禪師の弟子である「上野國淨土院一乘仏子教興・道応・真靜、下野國大慈院一乘仏子広智・基德・鸞鏡・徳念」⁽⁴⁰⁾らの力添えがあつたからであるという。これらより、最澄と綠野寺の道忠や教興などが緊密な關係

にあったことが知られる。もちろんこれらは否定しようもないが、今の『金剛頂瑜伽經』は関東を中心とした空海の写経勸進という教化活動の成果であることが明らかとなり、むしろ最澄より空海との連がりの方が浮び上がってくる。今、最澄との関係で名の挙がった広智なども空海より（弘仁六年）三月二十六日付の写経依頼の書状⁴を受け取ったと思われ、必ずしも最澄とだけの師資関係ではなかったように思われる。当時、関東の仏教界では、空海の真言・最澄の天台両教団に対して特に偏らない受容態度を取っていたのかも知れない。それだからこそ、関東を中心とした空海と最澄の教化活動、すなわち教線拡大の努力がなされたと思いたい。加えて『叡山大師伝』で実際には弘仁八年（八一七）に行なわれたとされる最澄の関東行化を弘仁六年としているのは、空海のこのような教化活動に対する何らかの配慮がそこに働いたからとみるのはやや飛躍した発想であろうか。

むすびに

いわゆる純密は最澄・空海の入唐により請来されたが、その經典儀軌類は秘密の經典なるが故にその流布も一般的でなかったと思われる。經典を書写する、すなわち写経をするためには当然のことながら底本となるべきテキストが必要であり、テキストになるべき經典が無ければ写経という行為は成立しないに違いない。今の『金剛頂瑜伽經』（浄院寺一切經）もテキストとなるべき經典の請来の経緯や空海の書状などから、当時、広く流布していなかった經典であったと思われる。それが関東の地で弘仁六年に書写されたということに

注目したが、その直接の機縁は同年三月から四月にかけての空海による関東を中心とした密教經典書写の働きかけであろうことが明らかにになったといえよう。まさに空海が下野の広智に宛てた書状に貧道、大唐に遊ぶで習ひ得るところの真言秘藏、其の本、未だ多からざるに縁つて、久しく講伝に滞る。今思はく、衆機の縁力に乗じて神通の宝藏を書写せむことを⁴。

というような願いに答えることになったものであろう。そして本写経は『金剛頂瑜伽經』としては三十帖冊子につぐ遺品で、恐らくわが国で書写された現存最古の遺品と見られる。

高山寺蔵『金剛頂瑜伽經』（浄院寺一切經）は数少ない平安時代初期の紀年を有するものとして、更には『続日本後紀』という正史の記録との関連を示した具体的な遺品としてよく知られた古写経であったが、これらによりその書写の背景などに種々興味深い点があることが明らかとなったといえよう。

〈注〉

- 1 本写経以外の代表的遺品には、知恩院蔵『菩薩地持論』十帖（重文、延暦十六年藤原経繼撰供養經）、根津美術館蔵『順正理論』卷第六（重文、大同元年）、安藤積産台資会社蔵『大般若經』卷第九十五（重文、池上内親王御願經）、慈光寺蔵『大般若經』百五十二卷（重文、貞観十三年安倍小水願經）などがある。
- 2 田中塊堂著『日本写経綜覧』には「奈良六宗に代つて興つた天台、真言の平安仏教は加持祈禱の実践を主としたもので、經典の需要も著しく減少した。」（一五頁）とある。
- 3 『新訂増補国史大系』第三卷所収、仁明天皇承和元年五月の条（二六頁）。唐の円照が貞元十六年（八〇〇）に撰じた経録。詳しくは『貞元新定釈教目錄』といい、三十巻より成る。大正大藏經第五十五卷所収。
- 4 梵釈寺は延暦五年（七八六）桓武天皇の創建といわれ、現在の大津市滋賀里にあったとされる寺院に相当するとみられ、梵釈寺目錄はその

寺院にあった經典目錄を指すと思われる。

6 『新訂増補国史大系』第三卷所収、仁明天皇承和二年正月の条(三六頁)。

7 同右、仁明天皇承和六年三月の条(八六頁)。

8 『新訂増補国史大系』第三卷所収、仁寿三年五月の条(五一頁)。

9 代表的なものに田中塊堂著『日本写経綜覧』がある。

10 同書一二三頁。

11 道忠については『叡山大師伝』(『伝教大師全集』巻五所収)に「有東国化主道忠禪師者」、是此大唐鑒真和上持戒第一弟子也(附録七頁)とある。

12 『伝教大師全集』巻四、二六六頁。

13 『伝教大師全集』巻五、附録七頁。

14 同書、築島裕「高山寺経蔵の平安時代の典籍について」(四四〇五頁)参照。

15 築島裕著『平安時代訓点本論考』(昭和六一年、汲古書院)一九九頁、七一二三頁所載を参照。

16 宮澤俊雅「高山寺経蔵聖教内真言書目録」(高山寺資料叢書第十四冊所収)に詳しい。

17 大正大蔵経第五十五卷八八一頁中。

18 木本好信編『奈良朝典籍所載仏書解説索引』(平成元年、国書刊行会)には『金剛頂経』(不空訳)として『大日本古文書』正倉院文書より八件を所出しているが、それらは經典の翻訳年代(天寶十二年、七五三)や正倉院文書の記述により四一四五(金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』四卷に相当)を除いてすべて金剛智訳『金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』一卷に該当するとみられる。

19 古経堂の名で知られる養鸕徹定の収集品(知恩院所蔵)の中に「天平勝宝三年十一月十、十一日兩日間於大智寺 奉 尊与写竟」という奥書を有する『金剛頂瑜伽経』巻第一がある。これは大正大蔵経編纂の際にも校訂本として使用されたが、翻訳年代や書風より天平勝宝三年(七五二)の書写とは認め難い。恐らく、平安時代前期から中期の書写かと見られる。ただ、この写経にも本稿四〇頁上段に指摘した「後月輪而住、復請教令、時世尊入一切如来」の一文がなく、後に朱で挿入されているのは注目される。

19 例えば、木内堯央著『天台密教の形成―日本天台思想史研究―』(平成二年、北辰堂)には「つぎにみえるのは、弘仁三年(八一二)十月二十六日付の、『金剛頂真実大教王経一部三卷』の借請である(伝全五一四五四頁)。これによって、最澄ははじめて、不空訳の『金剛頂大教王経』三卷に触れたことになる。」(二五頁)とある。

20 『伝教大師全集』巻五(四五四〇五頁)所収。

『弟子最澄和南奉請本経事』

金剛頂真実大教王経一部三卷

右為三本経奉請一如件、来年四月以前奉写畢即奉上、不_レ敢損失。謹和南。

弘仁三年十月廿六日 弟子最澄 状上

乙訓真言院 側

21 空海の『勸縁疏』には三十五卷とあり、その内訳は『弘法大師空海全集』第六卷(筑摩書房、昭和五十九年)によれば、『大日経』七卷、『教王経』三卷、『略出経』四卷、『大日経疏』二十卷、『菩提心論』一卷。また一説には、『略出経』を除き、『蘇悉地経』三卷、『聖位経』一卷を加えるとする。(六三一頁)とある。今の三十六卷というのは誤写なのか、經典の組み合わせが違うのか断定できない。

22 『弘法大師空海全集』第六卷(筑摩書房、昭和五十九年)六〇七一二頁所収。

23 注21を参照。

24 平安時代初期の天台宗の僧。鑑真の弟子道忠に師事し、下野国大慈寺に住す。一般には最澄の関東行化の際、援助をしたことで知られている。

25 徳益・得一ともいい、奈良時代後期から平安時代初期に活躍した法相宗の僧。はじめ興福寺修円に法相を学び東大寺に住したが、後に東国に移り、常陸国筑波山中禅寺、会津の恵日寺を開いた。『慧日羽足』・『中辺義鏡』などを著わし、最澄と三一権実の論争を展開したことは有名。

26 『日本後紀』巻二十一、弘仁三年正月の条(『新訂増補国史大系』第三卷所収)によれば「從五位下藤原朝臣真川為_二甲斐守_一」(一一〇頁)と

- ある。
- 27 『日本後紀』卷二十四、弘仁五年七月の条(同前)に「從五位下藤原朝臣福当麻呂為_二常陸守_一」(一二五頁)とある。
- 28 『高野雜筆集』卷上(『弘法大師空海全集』第七卷、十三頁)所収。附編の本文校合表参照。
- 29 大正大藏經第十八卷二一〇頁下。
- 30 同前。
- 31 附編の本文校合表参照。
- 32 注18を参照。
- 33 管見の及ぶ限り、この点について述べてあるのは『群馬県の地名』(日本歴史地名大系第十卷、平凡社、昭和六二年)の浄法寺の項目(三一頁)のみのようである。
- 34 『伝教大師全集』卷五、附録三〇(二頁)。
- 35 『最澄』(原典日本仏教の思想2、岩波書店、平成三年)解説編、「最澄とその思想」(藺田香融著)の中、「三一権実論争について」に詳しい。
- 36 『叡山大師伝』(『伝教大師全集』卷五、附録三一頁)所出。
- 37 大日本仏教全書一〇一冊、一五〇頁上。
- 38 『叡山大師伝』(『伝教大師全集』卷五、附録七頁)所出。
- 39 同右、三一頁所出。
- 40 『高野雜筆集』卷上(『弘法大師空海全集』第七卷、十六頁)所収。
- 41 同右。
- 42

・ 本表は大正大藏經所収本（第十八卷）・国宝三十帖冊子所収本（第十一帖）・高山寺本（淨院寺一切經）の三本の不空訳『金剛頂大教王經』の本文を校合したものである。この際、三十帖冊子は法藏館刊行（昭和五二年）の複製を用いた。

・ 巻第三のみは文字の異同が非常に多いので前後を省略し、該当する文字のみを掲げた。

208上	下	中	207上	頁數
哈 唵嚩日羅 二合 怛麼 二合 金剛堅固善住 夜弭	微騰迦嚩弭 猶如遍修 唵菩提質多私怛波娜 唵質多鉢囉 二合 底 丁 以 反	諸設縛祖父 正流轉大覺 遍照最勝王	珠鬘纓珞 猶如胡麻 空藏大妙光	大正藏經第十八卷(本)
		2・c	b・1	頁數
二合 俱引 哈 唵嚩日羅 二合 怛麼 則堅固善住 二合 娜夜弭	騰迦嚩弭 由如遍修 唵菩提質多私怛波 唵質多鉢囉 二合 底 丁 以 反 微	諸設縛祖父 正流轉大大 遍照最勝主	珠鬘纓珞 由如胡麻 空藏大妙光	三十帖冊子所收本
		2	1	紙數
堅固善住 唵嚩日羅 二合 怛麼 二合 句引 哈	勝迦嚩弭 同上 〃	諸設縛祖父 同上 〃	同上 〃 〃	弘仁六年書寫高山寺本

44

下		中		211上		下		中		210上	
轉日囉 二合 係都		轉日囉 二合 底乞灑拏 三合		轉日囉 二合 達摩		依一切如來後月輪而住復請教令時世尊入		奇哉無比光		奇哉妙灌頂	
即彼婆伽梵		作一切神通		生大蓮華形		一切如來奇特加持		能淨清淨者		金剛寶形灌頂	
大漫荼羅出已		彼金剛蓮華形		轉日囉 二合 賀娑		奇哉無比幢		轉日囉 二合 計都		授与我手掌	
菩薩摩訶薩住世尊		轉日囉 二合 係都		轉日囉 二合 賀娑		轉日囉 二合 賀娑		轉日囉 二合 計都		轉日囉 二合 帝惹	
10・c		b・9		8・a		d・7					
轉日囉 係都		轉日囉 底乞灑拏 三合		轉日囉 達摩		依一切如來奇特加持		奇我無比光		奇我妙灌頂	
同上		作一切神通		生大蓮花形		(朱書で同文を挿入。)		能靜清淨者		金剛寶芽灌頂	
大漫荼羅出已		轉日囉 係都		轉日囉 達摩		奇我無比幢		轉日囉 計都		受与我手掌	
菩薩摩訶薩住世尊		轉日囉 係都		轉日囉 達摩		轉日囉 賀娑		轉日囉 計都		轉日囉 帝惹	
14		13		12		11		10		9	
轉日囉 係都		轉日囉 底乞灑拏 三合		轉日囉 達摩		同上		轉日囉 計都		同上	
即彼伽梵		轉日囉 底乞灑拏 三合		同上		轉日囉 賀娑		同上		同上	
同上		轉日囉 底乞灑拏 三合		同上		同上		同上		同上	
菩薩摩訶薩住世尊		轉日囉 底乞灑拏 三合		同上		同上		同上		同上	
14		13		12		11		10		9	
轉日囉 係都		轉日囉 底乞灑拏 三合		轉日囉 達摩		同上		轉日囉 計都		同上	
即彼伽梵		轉日囉 底乞灑拏 三合		同上		轉日囉 賀娑		同上		同上	
同上		轉日囉 底乞灑拏 三合		同上		同上		同上		同上	
菩薩摩訶薩住世尊		轉日囉 底乞灑拏 三合		同上		同上		同上		同上	

卷第二

奇哉金剛輪	漫茶羅三昧耶	不退轉法輪	從自心出	轉日曜二合婆沙	一切如來秘密語名金	剛三摩地一切如來語	智三昧耶	大轉輪智	輪轉戲論智
奇成金剛輪	曼茶羅三昧耶	不退轉輪	同上	轉日曜婆沙	一切如來三昧耶			大輪轉智	輪戲論智
15									
》	》	》	自心出	轉日曜婆沙	同上			同上	》

217下 ℓ 10	頁数
漫	大正藏經(第十八卷本)
19・d	頁数
曼	三十帖冊子所収本
1	紙数
同上	弘仁六年書寫高山寺本

△卷第三△

中				217上				下				中									
則不等一切	安住三昧耶	慈友而安住	應請一切仏	作已称自名	凡噫請勅如本教	金剛眼淨業	一切如來請語	我等讚汝尊	金剛拳勝誓	妙吉金剛染	金剛劍仗器	真剛威大炎	寶藏金剛峯	我礼金剛召	此一百八讚	無始無終	時十方一切世界	庵薩嚩怛他	如來所至已		
18・c																				b・17	
則仏等一切	安立三昧耶	慈友而安立	同上	教	噫	金剛眼淨等	一切如來讚語	我等請汝尊	金剛拳勝誓	妙吉金剛深	金剛劍大器	金剛威大燄	空藏金剛豐	我礼金剛口	此百八讚	無始終	十方一切世界	庵薩嚩怛他	如來至已		
13										12											
”	”	同上	於已称自名	應諸一切仏	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	”	同上		

ℓ 12 ℓ 9 ℓ 7 ℓ 6 ℓ 5 ℓ 2 218上
ℓ 1 ℓ 29 ℓ 26 ℓ 25 ℓ 24 ℓ 22 ℓ 21 ℓ 20 ℓ 19

婆 二合 略 日囉 藥 哩夜 麼 尼 藥 囉 日囉 藥 夜 麼 羅 藥 日囉 藥 哩 二合 藥 嚩 日囉 藥 嚩 二合 三 唇 藥

嚩 三合 路 日囉 二合 嚩 哩夜 二合 麼 二合 同上 嚩 二合 多 日囉 二合 嚩 夜 二合 麼 二合 嚩 同上 嚩 哩 嚩 嚩 二合 同上 嚩 哩 二 唇 嚩

2
〃 〃 同上 嚩 二合 〃 同上 麼 ナシ 〃 同上 嚩 二合 嚩 〃 〃 〃 同上 嚩 〃 〃 〃 同上 嚩 〃 〃 〃 〃 〃

218中 ℓ 3	ℓ 27	ℓ 25	ℓ 24	ℓ 23	ℓ 22	ℓ 20	ℓ 18	ℓ 17	ℓ 16	ℓ 15	ℓ 13									
日 嚧 二合	娑 路	僊 也	叉 二合	薩 多	僊 也	悉 囉	日 誓 水	黎 提	也 二合	茶	轉 耶 涅 哩	惹 囉	惹 反 吉 溪	避	藥	鏤 薩 婆	若	日 囉	吒 二合	他 藥

20・a

日 嚧	ナ シ	你 也	叉	薩 多 二合	你 也	薩	囉	日 同上	梨	帝	ナ シ	拏	二 合	轉 二合 耶 涅 哩	ナ シ	ナ シ	你 也 二合	反 吉 溪	跛	摩	鏤 二合 薩 囉	若	同上	吒	多 摩
--------	--------	--------	---	--------------	--------	---	---	---------	---	---	--------	---	--------	------------------------	--------	--------	--------------	-------------	---	---	-------------------	---	----	---	--------

3

嚧	僊	僊	同上	同上	囉	ナ シ	誓	〃	〃	〃	〃	〃	〃	同上	僊 二合	〃	〃	〃	同上	惹	囉	〃	〃
---	---	---	----	----	---	--------	---	---	---	---	---	---	---	----	---------	---	---	---	----	---	---	---	---

219上 ℓ 3	ℓ 2		218下 ℓ 1	ℓ 29	ℓ 28	ℓ 27	ℓ 23	ℓ 19		ℓ 18	ℓ 17	ℓ 12	ℓ 8	ℓ 5	ℓ 4							
日 囉	嚩	弩	囉 二合	日	伽 吒	烏	伽	唎	嚩	二反 合上	亨 淫	嚩	姪	紇	二 合	嚩	二 合 囉 日 囉	現	現 証	日 囉	二 合 耽	日 囉

21・b

日 囉	藍	拏	囉	同上	伽 二合 吒	同上	伽 二合	喝	縛	〃	同上	同上	繫 彼 弟 子	ナ シ	反 上 淫	夷 淫	縛	吒	吃	ナ シ	縛	嚧 日 囉	見	ナ シ	日 囉	三 合 耽	日 囉
--------	---	---	---	----	--------------	----	---------	---	---	---	----	----	------------------	--------	-------------	--------	---	---	---	--------	---	-------------	---	--------	--------	-------------	--------

4

囉	同上	同上	囉	ナ シ	伽 二合 吒	焉	〃	〃	同上	囉	ナ シ	ナ シ	繫 彼 弟 子	同上	反 上 淫	戒 淫	〃	〃	〃	〃	同上	嚧 囉	〃	〃	囉	同上	囉
---	----	----	---	--------	--------------	---	---	---	----	---	--------	--------	------------------	----	-------------	--------	---	---	---	---	----	--------	---	---	---	----	---

ℓ 20	ℓ 12	ℓ 10	ℓ 9	ℓ 8	ℓ 6	219中 ℓ 1	ℓ 29	ℓ 27	ℓ 13	ℓ 12	ℓ 11	ℓ 10	ℓ 9	ℓ 8	ℓ 7	ℓ 6	ℓ 5									
日羅	踊	哈	日羅	囉	日	諾	日羅	踊	但	成	応	日羅	轉日羅 二合 麼麼	僂	日羅	二合 左摩毘訛遮	日羅	二合	波	二合	二合	二合	縛	日羅	二合	僂也

日羅	踊	哈	〃	〃	同上	惹	同上	踊	但	生	同上	日羅	ナシ	係	日羅	者摩遮	日羅	三合	轉日羅	ナシ	波	ナシ	縛	日羅	三合	你也
----	---	---	---	---	----	---	----	---	---	---	----	----	----	---	----	-----	----	----	-----	----	---	----	---	----	----	----

5

囉	同上	哈	囉	囉	ナシ	同上	囉	同上	〃	同上	摩	囉	〃	同上	囉	同上	囉	同上	〃	同上	彼	〃	同上	囉	同上	僂
---	----	---	---	---	----	----	---	----	---	----	---	---	---	----	---	----	---	----	---	----	---	---	----	---	----	---

ℓ 8	ℓ 7	ℓ 6	220中 ℓ 4	ℓ 23	ℓ 13	ℓ 11	ℓ 9	ℓ 8	ℓ 7	220上 ℓ 2	ℓ 12	ℓ 11	ℓ 9	ℓ 8	ℓ 6	219下 ℓ 2	ℓ 21								
日羅	但	日羅	喜	應	生	墮	切	授	日羅	拍	手	生	墮	僂也	南	二合	僂也	反	尼	日羅	日	日羅	於	麼	囉

22・c

日羅	二合	唾	日羅	二合	同上	當	主	墮	印	受	日羅	二合	苦	日羅	二合	指	指	由	同上	你也	喃	ナシ	你也	同上	日羅	二合	ナシ	〃	同上	磨	同上
----	----	---	----	----	----	---	---	---	---	---	----	----	---	----	----	---	---	---	----	----	---	----	----	----	----	----	----	---	----	---	----

7

6

囉	同上	囉	二合	寿	應	當	同上	隨	〃	同上	囉	二合	同上	囉	二合	〃	〃	同上	隨	僂	〃	同上	僂	反	尸	囉	二合	同上	囉	ナシ	同上	ナシ
---	----	---	----	---	---	---	----	---	---	----	---	----	----	---	----	---	---	----	---	---	---	----	---	---	---	---	----	----	---	----	----	----

ℓ 18	ℓ 16 ℓ 13	ℓ 12 ℓ 10 ℓ 7 ℓ 5	ℓ 4	ℓ 24 ℓ 22	ℓ 17	ℓ 21	ℓ 12	ℓ 28 ℓ 27 ℓ 23	ℓ 21	ℓ 18 ℓ 16 ℓ 15 ℓ 13 ℓ 9
蘇 弭 羅 輸	二合	語 合二 羅 嚩 反丁 口	羅 日 囉	鈴 召 得	結 騰 堅 堅	結 智 印	任 今 身 以 鏤 野 嚩			

24・a										23・d			
素 弥 羅	同上	ナシ	同上	ナシ	囉	縛 反丁 以	囉	〃	同上	得 召	作 勝 堅	同上	縛 印 智
													〃 〃 同上
													已 鏤 二合 ナシ 嚩 二合

10				9				8				
輪		誦		囉 鈎		堅 結		住 金 耳 以				
〃	〃	同上	同上	〃	〃	〃	〃	同上	同上	〃	〃	同上

ℓ 19	ℓ 18	ℓ 17 ℓ 16 ℓ 11 ℓ 9 ℓ 8	ℓ 3	ℓ 21	ℓ 20 ℓ 15 ℓ 13	ℓ 9	ℓ 25 ℓ 16	ℓ 7	ℓ 22
努 阿 庾 都 哩 姪 嚩 日 嚩 日 嚩 日 嚩 悉 唎 摩 羅 日 囉 日 拍 火 歌 令 鬘 上 及 今									

25・b													
ナシ	薩	庾 二合	親	哩 二合	姪 二合	嚩 二合	日 嚩 二合	嚩 二合	日 嚩 二合	日 嚩 二合	達	麼	囉
											同上	同上	ナシ
													同上
													大 語
													同上
													慢 大 反
													同上

12						11					
〃	〃	〃	〃	〃	同上	囉 二合	同上	囉 二合	同上	唎	同上

ℓ 27		ℓ 26ℓ 20ℓ 19				ℓ 15ℓ 14ℓ 12		ℓ 11 ^{223上} ℓ 8		ℓ 24	ℓ 23	ℓ 22	ℓ 21	ℓ 20																						
那	囉	日	賀	囉	藥	嚩	日	婆	讒	耶	使	日	羅	那	日	囉	日	囉	嚩	哩	日	藥	嚩	哩	摩	也	薩	婆	嚩	蘇	布	使	庚	寐	婆	嚩

26・c																																								
ナシ	二合也	磨	哩二合	縛	摩	日囉二合	哩二合	嚩二合	日囉二合	日囉二合	那二合	囉	日囉二合	ナシ	沙	纔	同上	”	嚩二合	摩	囉二合	嗽	同上	”	二合	那二合	ナシ	二合	日囉二合	日囉二合	日囉二合	嚩二合	哩二合	日囉二合	摩	縛	哩二合	磨	二合也	ナシ

13																											
同上	囉	ナシ	”	”	同上	同上	囉	波	同上	耶	同上	囉	二合	”	同上	囉	囉	”	同上	囉	二合	”	”	”	”	同上	”

ℓ 17			ℓ 16ℓ 15ℓ 14ℓ 11ℓ 10							ℓ 9		ℓ 8 ^{223中} ℓ 4			ℓ 28			
日囉	誑	𑖀	他	藥	誑	二合	引縛	日囉	日囉	藥	𑖀	今	已	磨	日囉	誑	日囉	
同上	哦	梵	ナシ	摩	哦	ナシ	ナシ	嚩	”	同上	摩	𑖀常	ナシ	以	摩	日囉二合	哦	日囉二合
囉	”	”	”	”	”	”	同上	縛	囉	囉	”	”	”	同上	同上	囉二合	同上	囉二合